

7月29日～31日までの3日間、日赤救急法講習会に参加した。昨年は、家庭看護法講習会に参加し、その内容が有意義かつ楽しかったため、今年は救急法の講習会にも参加してみることにした。

いざ会場に入ってみると、意外に男性の多いこと。理工学部の学生や、ライフセーバーをしている人など、普段何となく過ごしては出会えない人達と接することができた。そして皆、真面目。いやでも出席せざるを得ない授業とは違い、自主的に申し込む講習会だけあって、やはり皆、やる気がある。ただ、この講習会は、3日間に渡って遅刻・早退・欠席が認められず、さらに最終日に筆記と実技の試験があるので、今までの努力を無駄にしたくないと、皆、必死だったのかもしれない。

午前は講義、午後は実技を行ない、盛り沢山の内容だったが、特に印象的だったのは、講師の全身包帯と、大学生活における具体的なシミュレーションである。全身包帯とは、頭から足の先まで（顔面も）、三角巾を使って全身を覆うことである。講師のジェイソンのような姿に皆興奮していたが、それよりも体の各部位に合わせた三角巾の使用法と、ご指導下さった講師

いざという時役立てるゾ!!

8月2日、友人の勧めで東京救急協会の上級救命講習会に参加しました。わずか1日の講習で上級救命技能認定証を頂く事が出来ました。講師の方々は、現場で活躍している方がばかりだと聞いていたので、どんなに難しい事をするのかと初めはハラハラしていました。

の技術に感嘆した。また、最後のまとめとして、具体的な場面を想定した救助法を学んだ。

「白門祭の模擬店に、小さな孫と遊びに来たおばあちゃんがウィナーをのどに詰まらせた。どうすればよいでしょうか。」などの例が出され、どうしたらよいのか考えた。背中を叩く、気道を確保するなどの他に、協力者と役割分担をする、不安がっている孫を励ます、という見落としがちなことも確認した。

今回のような講習会参加する意義は、面識のなかった人と知り合えること、今まで知らなかった知識・技術を獲得できること、そしてそれが、自信につながるのだと思う。私も、自分の中の「自信レベル」が少し上がったような気がする。



文学部社会学科3年 可知美沙子

しかし先生方は、専門知識のない私達でも教わった通りに人口呼吸や心臓マッサージをすれば、命を助ける事が出来ると強くおっしゃって下さり、とてもやる気が出ました。講習の中ではスウェーデン産の人形を使用し、それが実際水死した少女を形どって作ったものだと聞いた

時は恐ろしくなりました。人形ではあるけれど、生後間もない赤ちゃんの模型が出て来た時、みんなが凄く大切そうに措置を行っている姿がとても印象に残っています。

参加した人達は皆協力的で、実際の現場でも救命手当の方法を知っている人が多ければ多い程、人の命が救える事を体感しました。

他にも、怪我をしている人の応急処置の仕方は、私自身、過去に、部活動中に熱中症で倒れた後輩や、足をひねってしまった子の治療の方法が分からずに運ぶ事しか出来なかった経験があったのでとても参考になりました。これを忘

救命手当の必要性

私は5歳の頃、父を心不全で亡くしています。そのため、命の儚さというものを、幼い頃から身近に感じていました。人が亡くなることほど、悲しいことはありません。一人でも多くの人の命を助けたい!! しかし、世間をみても、私自身を見ても応急手当の知識の低さというものが浮彫です。そんななか、大学に入学して、応急手当の普及をしているサークルを見つけました。私を含め4人。しかし、やる気だけはどのサークルにも負けません。そして、救命の知識の無い私は、今回の講習会に参加しました。

今回のこの「上級救命講習」では、世界統一基準に沿った応急手当を学びました。人工呼吸、心臓マッサージなどは、実際に訓練用の人形を使い実践してみたり、止血法や搬送法は参加者とともに、ペアーを組み体験しました。私は、教習所で心肺蘇生法などを学んではいたのですが、改めて講習を受けることで、忘れていた知識を甦らせることができました。どれも、けっして難しい処置ではありません。しかし、いざ



れずに身近な活動に少しでも役立てる事が出来たら…と思います。

理工学部応用化学科1年 和田恵利奈



人が倒れていた時に、今日学んだ処置が迅速にできるかという、難しいことだと思います。今年だけで、私は倒れている人を2人も目にしましたが、実際何もできなかったことを覚えています。つまり、普段から応急手当を確認しておくことが大切だと思います。そして、そのような状況になったとき、率先して手当てをしてあげることが大切だと、救急協会の方は言っていました。119番通報から、救急車が到着するまでには、平均5~6分かかるそうです。「命を救うのは、医者や救急隊員だけじゃない!」その場に居合わせた人の協力も必要なんだ!!」という言葉はとても印象に残りました。

東京救急協会や小石川消防署の方々のご協力で、夏休み最後に貴重な体験ができました。本当にありがとうございました。これからは、サークル活動として、私自身が多くの人に救命手当の大切さを伝えていけたらいいなと思います。